

第22回
開成町福祉作文コンクール
入賞作文集

平成21年10月

社会福祉法人 開成町社会福祉協議会



「ともしび運動」はお年寄りも若者も、男性も女性も、障害のある人もない人も、国籍が違っても、すべての人がともに手を取り合って歩むことができる「ともに生きる」福祉社会をめざすことを願って始めました。

小学生の部

優秀賞

開成町社会福祉協議会長賞

二人のおばあちゃん

五年 川瀬 健 : 1

開成町社会福祉大会朗読作文

共同募金会開成町支会長賞

言葉の力

六年 中野 泰 誠 : 1

開成町敬老会朗読作文

開成町教育長賞

「一緒に。みんな笑顔で。」 四年 佐志 ちひろ : 2

優良賞

優しい町「開成町」

六年 高城 秀 翔 : 3

老後のパートナー

六年 吉田谷 美 稀 : 3

佳作

視かくに障害のある方の希望の光

六年 山口 愛 : 4

私の福祉体験

三年 木村 ゆ い : 5

ぼくの福祉

五年 谷地田 海 斗 : 5

「光の里」

四年 草柳 陸 : 6

いろいろなどころにある福祉

五年 森山 瑛 斗 : 7

中学生の部

優秀賞

開成町社会福祉協議会長賞

福祉について思う

三年 遠藤 優 貴 : 8

開成町社会福祉大会朗読作文

共同募金会開成町支会長賞

「笑顔を大切に」

三年 佐野 知 美 : 9

開成町敬老会朗読作文

開成町教育長賞

私の祖父 三年 石渡 安 奈 : 10

優良賞

支え合うということ

三年 小川 留 依 : 12

フェイストゥフェイスの地域力

三年 前田 菜々美 : 13

佳作

心と笑顔

三年 遠藤 未 菜 : 14

インスタントシニアを体験して

三年 遠藤 美 希 : 15

小さな思いやり

三年 吉川 美 帆 : 17

助け合う心

三年 下山 梨 穂 : 18

貧しい子どもたちとユニセフ

三年 岩科 和 美 : 19

小学生の部

優秀賞

開成町社会福祉協議会長賞

二人のおばあちゃん

五年 川瀬 健

今年の夏、ぼくは忘れることのできない二人のおばあちゃんと会うことができました。

一人目は、さ江さんです。八十九歳になるのですが、十二年間ずっと寝たきりです。食事もトイレもお話もできません。家族が毎日毎日お世話をしています。ぼくが会いに行った時はのどに詰まったたんを吸いとりてあげていました。管が奥に入ると、苦しそうにせきをします。何もできないけど、何もわからないわけではありません。だから返事がなくてもいつぱい話しかけます。いつぱいさわってあげます。筋肉を使えないのでこずれやあごが固まってしまつなどの障害を少しでもふせぐ事につながります。

介護保険というしくみが充実してきてとても家族は楽になったと話してくれました。週四

日在たく介護の方が来て、入浴、歯みがき、ヘアカットなどをしてくれるそうです。また、ショートステイといつて二泊三日くらいのお泊まりで家の人が少し休めるよつなシステムもあるのです。どんなに大切な家族でも十年以上お世話を続けることはとても大変と思います。さ江おばあちゃんの手をにぎると、おばあちゃんはお話できた気がしました。心の中でお話できた気がしました。

もう一人のおばあちゃんはモトさんです。八月になんと百歳になりました。モトおばあちゃんは何でも食べられ、歩行器具でトイレも行け、ぼくといつぱい話げできました。戦争がつらかつたこと、五人のお母さんであること、夕食にハンバーグを食べたこと、富士山にもう一度登りたいなど、ぼくも負けてしまつたことなパワーでした。元氣の源はクヨクヨしないことといつぱい食べることだと教えてくれました。モトおばあちゃんは、週に二回バスで老人ホームに行つて友達と交流してくるそうです。

二人のおばあちゃんを通して心に残つたことは、どちらのおばあちゃんも家族と一緒に生活できて安心して生きている感じがしたことです。福祉とは「ふつつのくらしが幸せであること」だそうです。ぼくは毎日ふつづくらし

ていてそれを幸せだと思つて生活していなかつたことに気がつきました。あたりまえの毎日に感謝することができたのは二人のおばあちゃんからの大きなプレゼントになりました。いままでがんばつてくれた人々に「福祉」でお礼をしていきたいです。

開成町社会福祉大会朗読作文

共同募金会開成町支会長賞

言葉の力

六年 中野 泰誠

ぼくのおじいちゃんは七十六才。遠くはなれた鎌倉に住んでいます。

今年、ヘルニアの手術でせいみつ検査をしたところ、じん臓からガンが発見され、じん臓を一つ取らなければいけなくなつたので、続けてお腹を切ることになりました。

ぼくは、おじいちゃんにいつも何か作つてもらつたりしているの、ぼくも何かしてあげたいと思ひ、メッセージを送ることにしました。何がいいか考え、決まつたのが野球のほんとくにもらつた『氣力』という言葉です。この言葉

には、『あきらめない心』という意味がありました。ぼくはこの『気力』という言葉を送りました。おじいちゃんは、ぼくの送った『気力』という言葉に、とても喜んでくれました。

おじいちゃんの手術は、無事成功しました。まだ意識がもうろうつとしている中、ぼくの送った『気力』という言葉を、何度か言っていたそうです。

退院してから、鎌倉のおじいちゃんの所に行くことになりました。ぼくは、まだぎずの痛むおじいちゃんを、もっとはげめたいと思い、自分の筆で『気力』と書いて持っていくことにしました。おじいちゃんだけでなくおばあちゃんにも『元氣』という字を書くことにしました。二つの字を持って行くと、とても喜んでくれました。

ぼく自身は、病気を治すことはできないけれど、力をあたえたり、勇気づけたりすることができるんだなと思いました。たった一言の言葉でも、とても役に立つんだなと思いました。だからこれからも、おじいちゃんや、おばあちゃんを力づけたり、勇気づけたいです。

ぼくは、おじいちゃんにメッセージを送り元気になることができたことから、たった一言でもとても力があるんだなと思いました。だから友達

や家族に対して、力づけられたり、勇気づけられたりするような言葉をかけて、その人を幸せにしていきたいです。

開成町敬老会朗読作文

開成町教育長賞

「一緒に。みんな笑顔で。」

四年 佐志 ちひろ

私は、一学期に総合の学習でユニバーサルデザインについて調べました。ユニバーサルデザインとは、だれもが使いやすいデザインという意味があります。こうした考え方は、最初は、デンマークで生まれた物だと言われています。しょうがいのある人も、しょうがいのない人と同じように、出来るだけ、ふつうの生活が出来るように、しょうがいのある人も、ない人も、協力してくらせるすみよい町を作ろうとしたのが始まりだそうです。

私の住んでいる開成町でも、くらしやすい工夫が見られます。だれもがくらしやすい仕組み作りは、かんきょうを整えていく事で、あるてい度までできる事が分かりました。これから

は、共に生きていく私達の気持ちのバリアフリーが大切だし、共に幸せに楽しく生きる工夫や取り組みが大事だと思います。

うちにはおばあちゃんがあります。おばあちゃんも、もつとお年よりの人や体の不自由な人の役に立てばと、色々な活動をしています。私もお年よりのとの交流に一緒に行った事があります。私は一緒におり紙でお人形をおりました。私はおり紙はあまりとく意ではないけれど、一緒におり紙をおる事で、私も楽しかったし、お年よりの人も楽しそうにしてくれていました。だからのために、何かをするのは、特別な事ではないのだと思いました。

おばあちゃんのやってる活動の一つに「車イス社交ダンス」があります。車イス社交ダンスは車イスに乗っている人と乗っていない人がペアになってダンスをします。おばあちゃんはそのサークルに入っていて、体の不自由な人と一緒にダンスを楽しんでいます。ダンスをする事は、体にしげきをあたえるだけでなく、心や気持ちを出す事でもあるので、しょうがいのある人もない人も、共によるこびを感じたり、楽しい時間を過ごせるそうです。そのサークルの目的は、共に楽しく共に生きる社会を作る事だそうです。

共に生きる事は特別な何かをすることではなく、自分も楽しい事を一緒に楽しめるように少しだけ工夫をする事なのだと思います。私もそんな工夫をできるようになれたらいいと思います。

優良賞

優しい町「開成町」

六年 高城 秀翔

夏休みの間に、選挙の車やテレビで国会議員の人達が話をしているのを聞いて、不思議に思ったことがあります。

一つは、「少子化問題」の話です。ぼくは三人兄弟です。三人兄弟といっても、開成町ではあたりまえです。それを母に言ったら、東京や他の町では、一人っ子や多くて二人兄弟、もしくは、子どもを持たない大人が多いのだと言っていました。母が言うには、新しくできたスーパーに豚ロース肉を買いに行くと、四枚入りが多いけれど、前からあるスーパーは、きちんと開成町の家族を知っているから、五枚入りに

であると笑っていました。開成町には、なぜ子どもが多いのかと聞いたら、子どもを育てるための人の優しさやよい環境があるからだとも話してくれました。

二つめは、「老人医りよう問題」です。老人医りよう問題で苦しんでいるのは、若い人といっしょにくらしていない人だと思っけれど、開成町はおじいさんやおばあさんくらうしている人が多いと思います。友達の家に行っても、おじいさんやおばあさんが優しくしてくれまう。開成町は優しい人が多いから、優しい人達が集まってくらうしているのかもしれないと思いました。

開成町には老人ホームもあります。福祉センターでは、障害を持った人達が物を作ったりする場所もあります。デイサービスといって、介護を手伝っってくれる所もあるみたいです。

こんなふうな、たくさん場所、たくさん人達が、みんな助け合っ場所を作っている町が開成町なのだと思います。だから、開成町には「少子化問題」がないのだらうと思います。ぼくの父母は、宮城県から開成町に来まうた。開成町の人は優しく、住みやすい町だから、三人の子どもを育ててこれたと言っていまうた。

みんなが、一人一人が優しい町だから、みんなでよい町を作っていこうとしている開成町が、ぼくは好きです。

老後のパートナー

六年 吉田谷 美稀

私は、八月二十日、福祉体験で自助具を見まきました。年配の方は、自由に何でもできるわけはないので、工夫して行わなければなりません。私は、年配の方でも私たちと生活は変わらないと思ってきましましたが、自助具の説明をきいて、年配の方々は、私たちよりも苦労している、改めて実感ましました。

自助具は、生活を助けるものです。たとえば、背中が洗えない人のために壁にはりつけるたわしがあります。たわしを動かすのではなく、自分が動くことで、楽に背中を洗えるのです。他にも、くつ下をはく道具、物をつかむ力が弱い人のための取っ手など、様々な自助具がありました。私はまだ自助具を使う機会がありませんが、はつきりとは言えないのですが、自助具は、使う人の生活の一部であり、なくてはな

らないもの、いわゆる「パートナー」のような存在だと思いました。使う人がいなければ力を発揮できない自助具には、その言葉がぴったりだと思いました。

生活の「パートナー」である自助具の中で、私が興味を持ったものがありました。それは、トランプホルダーで、カードがうまくつかめない人が、手札を持つためのものでした。最初は、こんな生活の役に立たないじゃないかと思っただけですが、それは人それぞれで、トランプをやる人にとってはまったく役に立ちませんが、トランプが趣味の人にはとても役立つんです。それに、仕事をやめた人や人との交流が減った人には、大事な人との交流を保つためにトランプを使うこともあると思います。そういった意味では、自助具は、「人の楽しみや交流を助ける道具」でもあるのではないかと思いました。

自助具は、確かに人を助ける道具ですが、自助具があるから何でもできるだろうという考えは、あまりよくありません。私たちが、自助具を使っている人たちを支えて、自由に生活するための後おしをしてあげる、「サポーター」にならなくてはいけないのではないか。私は、そんなことを考えました。

佳作

視かくに障害のある方の希望の光

六年 山口 愛

私は、盲導犬センターに行つて、視かく障害の体験をしてきました。

このセンターでは、毎日PR犬という犬がデモンストレーションをやっています。PR犬が盲導犬の仕事を紹介する、これがデモンストレーションです。PR犬は、盲導犬にはまだなれないといわれた犬たちです。障害のある方と生活して、本当に事故にあつてしまつたら、とりかえしのつかないことになります。なので、盲導犬ではなく、PR犬として働いているのです。PR犬は、デモンストレーション中、ずっとそばをふつていました。盲導犬は、楽しくほめて育てるということを初めて知りました。盲導犬は、「頭が良くて、行き先を言えば、つれて行つてくれる。」と思われがちだけど、盲導犬も犬なので、場所は分かりません。飼い主である障害のある方が、一生けん命、頭の中に地図を思いつかべて犬に指示を出しているのです。

訓練が好きで状況をすぐに判断できる犬が

訓練したうえで盲導犬になり、視かくに障害のある方の希望の光となって働いていくのです。

視かくに障害のある方の気持ちをもつと知りたいたと思つた私は、歩行体験をさせてもらいました。盲導犬訓練中のピラといっしょにアイマスクをして、館内を歩きました。はじめは、ピラとは初対面だったので、信用しきれずに、曲がり角なども教えてくれました。そして、だんだんピラに任せられるようになってきました。「少し速かつたかなあ。」と思う時もあったけれど、一生けん命、周りを気にして、楽しく私と歩いているのが伝わりました。そしてスタートした所にもどつてきました。アイマスクをはずすと、周りが明るく見えました。

視かくに障害のある方は、本当に真つ黒な世界にいて、不安もたくさんあると思うけれど、盲導犬のおかげで、光がさしこみ、自分の目となって働いてくれていて、本当にたよりに存在、なくてはならない存在になつていて、真つ黒な中、一頭の犬が障害のある人に周りの状況を教えてくれていて、障害のある人はその一頭の犬をたよりにしている。これは、犬を本当に

信用していないとできないことだと思えます。日本では、盲導犬を必要としている人が約五千。そのうち盲導犬は千頭しかいません。少しでも盲導犬を必要とする人に盲導犬を届けられるように、私も協力していきたいです。

私の福祉体験

三年 木村 ゆい

私は、八月二十三日福祉体験へ行きました。私には車いすのおばあちゃんがいるので、体験してみたいと思っていました。車いすはどんな人がのるものなのか、どんな所が不便なのか、どうやって進むのか、などが知りたかったからです。まずは手動で体験しました。手動は、曲がり角がすごく大変でした。でもしばらくのつてるとだんだん曲がり方が分かってきて、左に曲がるときは、右のハンドルのみ回して、右に曲がるときは左のハンドルのみ回せばいいと何回ものつて分かりました。

次は、車いすののつて、おしたりおされたりしました。まずエレベーターにのるときは、のつている人は手をぶつけないように手をしま

つてもらい、おしている人は、そのままつづく進みます。車いすは大きいのですみの方にいます。下りるときはエレベーターの中はせまいので方向転換できないので後ろ向きのまま出ます。黄色い点字ブロックの上はのりこちが悪いので、そつと動かします。だんさを上るときはステップングレバーをふんで、のつている人に、

「上がります。」

と声をかけ、にぎっている所をおし下げて前輪を上げてだんさの上に前輪をそつとのせて、後輪をつかせてのりこえます。だんさを下りるときは、必ず車いすを、後ろ向きにして下ります。前向きに下りるとずり落ちたり、のつている人が不安になるからです。まず、

「だんさを下ります。」

と言つて、後輪を下ろします。前輪を上げ車いすを後ろに引いてそつと下ろせば下りれます。

坂道を上るときは車いすに体をつけておしあげます。理由は体がふれると安心するからです。坂道を下りるときは、車いすを後ろ向きにして下ります。前向きにするとずり落ちたりのつている人が、不安になるからです。

車いすは、足の悪い人や体の不自由な人が使う大切な足がわりだと分かりました。おばあち

やんの苦勞がなんとなく分りました。

ぼくの福祉

五年 谷地田 海斗

「福祉」という言葉をよく聞きます。でもこれまでのは、あまりピンときませんでした。福祉がどういうものなのか、よくわからなかつたのです。でも、昨年、四年生で総合の学習をしてきて、少しずつ、考えるようになってきました。

まず、ぼくが出来る福祉活動つて何だろうと考えてみました。ぼくは放課後、外で友達と遊ぶことが多いので、そんな時、困つている人がいたら手伝いたいと思います。それに、道を歩いている時、ゴミが落ちていたら拾うのも、福祉につながるかなと思います。

日本は、長生きの国です。これからも、お年寄りが増えていきます。自分の親や自分もいつかお年寄りになります。その時、親切にされたら嬉しいと思つし、冷たくされたら悲しいと思います。これはきつと、みんな同じように思います。だから、今、ぼくは、お年寄りにやさし

くしたいと思います。

今、自分が出来ている事は、お年寄りの話し相手になったり、小さい子のめんどうをみる事です。これからも続けていくつもりです。

この前、おつかいに行った時、こしの曲がったおばあさんに会いました。その人は、体を伸ばすのがつらいようで、会計の台にカゴをのせるのに苦労していました。ぼくは、心の中で、「どうしようかな」とまよってしまったけれど、やっぱりおもいきって手伝うことにしました。すると、おばあさんは、ぼくに、

「ありがとう。」

と言ってくれて、とても嬉しくなりました。人の役に立つって、気持ちがいいなあと思いました。家に帰ってからお母さんに話すと、「海はやさしいね。良いことをしたね。」と言ってくれました。ますます嬉しくなりました。

ぼくは、これまで、福祉はとてもむずかしいと思っていました。日常で自分が出ることなど思いつきませんでした。でも、意外にかんたんなことなのではないかと思うようになりました。自分に出来る、こういう小さいことが、誰かをよるこばせたり、助けることが出来るのです。小さいことでもいいから、勇気をもってや

ってみようと思います。

「光の里」

四年 草柳 陸

八月二十三日、おばあちゃんの働いている光の里というろう人ホームのお祭りに行きました。会場へ行くと、高れい者の人達が楽しく歌を歌っています。

聞いている人は、手をたたいています。ぼくは、歌を聞きながらやきそばを食べました。

やきそばを口に入れようとしたしゅん間、二つの事に気づきました。

一つ目は、めんや野菜が小さく切られています。

二つ目は、お肉がやわらかい事です。次に、高れい者の人達が作った、いろいろな作品を見ました。中には、ビーズで小田原じょうとさくらをえがいている人がいました。

他にも、習字や、絵などすごく上手な作品ばかりでした。光の里では、飲みものを飲む時は、牛乳などを飲み、たんぱく質やカルシウムをとっています。

ヘルパーの人達は、高れい者の人達の事を色々と考えているのだなあと思いました。

次に、トイレを見せてもらいました。すると、なぜかすぐがありました。すぐがある理由は、だれかが出る時、すずを鳴らすと、かいこの人が来て車いすにのるのを手つだってくれるのです。

次におふるを見せてもらいました。中には、三つの種類があります。一つ目は、ねたきりの人のためのおふるです。シートがないベットのこしをおろして、入れます。二つ目は、おふる用の車いすにのり、そのままおくにおして入ります。三つ目は、イスにすわってそのままイスを下におろして、入れます。

このおふるはふつつのおふるよりふかくなっています。車いすの人達にとっては、すぐたすかると思いました。

実さいに行つて、話してみると、高れい者の人達は、心がすごくゆたかな人ばかりでした。本当に光の里へ行つて勉強になりました。高れい者の人達が、明るくくらせるように、しせつなどが工夫されている事もわかりました。そんなさまさまな工夫をこれからも町作りでやっていってほしいし、ぼくもおじいちゃん、おばあちゃん達と仲よくくらししていきたいと思

ます。

いろいろなところにある福祉

五年 森山 瑛斗

ぼくは、夏休みのはじめに、マックスバリュに一人で自由研究の部品を探しに行きました。その時、階段の下に、点字ブロックを見つけた。点字ブロックのもようが、点々なので、進めと書いてあります。

次には、階段の横に手すりがありました。手すりは、高れい者がよく使っています。ときどき高れい者以外でも使っている人がいます。ずいぶん前に、はだ野のデパートに行ったときは、車いす専用のスロープがあり、トイレも車いすの人が使える、広いトイレがありました。エレベーターに乗ると、車いすの人がおせる、低い位置のボタンもありました。ボタンには、目の不自由な人が使う、点字がありました。デパートだけではなく、駅や、公共の場所には、ほとんど、点字があることに気がつきました。ほとんど、点字があることに気がつきました。

二年前、ぼくが三年生のときのことで。腸がいたくて、病院に行って、検査した結果もつ

腸でした。手じゅつが終わったあと、動こうと、起き上がりましたが、いたくて、起き上がれませんでした。その時かんごしさんがつえをもつてきてくれました。そのつえは、高れい者が使うつえでしたがぼくも、移動手だんに使いました。

あるとき、トイレに行った時、手すりがあるのに気がつきました。手すりを使ったぼくは、初めて手すりを使って、手すりのありがたさを感じました。

ぼくは、手じゅつをしていないときは、つえは、高れい者だけが使う物だと思っていたけど、手じゅつをしてから、つえは、いろいろなときに使うとわかりました。

不自由な人が使って、楽になる物を作った人は、すごいと思いました。

ふくしの意味は、ふだんのくらしが、しあわせになることです。また、人間は、一人では生きてはいけません。人間は、みんなで支え合って生きて、生活していくのです。ぼくは、まだ一度も困っている人を助けたことがないので、もし、困っている人を見かけたら、勇気を出して、助けたいと思います。

開成町社会福祉協議会長賞

福祉について思う

三年 遠藤 優貴

最近、「福祉」ということばを毎日のように耳にします。少子化の影響で二〇五〇年には、六十五歳以上の高齢者一人を一人二人の働ける大人が支えることになるようで、そのため税金も高くなるようです。何か、一生懸命に働いても、自分のためというよりも、高齢者のために働くようなイメージさえ持っています。そんな時、福祉についての作文を書くことになり、迷っていると父が、「福祉って何」と聞いてきました。その時は何も答えられませんでした。国語辞典で、「福祉」を引いてみると、「幸福。しあわせ。」と書いてありました。とても抽象的でこれだけでは、答えが出せたとはいえませんが、奥深いものだし、また、これが正解という答えはないのではないかとさえ思えてきました。

そこで私なりに、もう一度考えてみました。そして、「福祉」とは「どんな障害者も高齢者も子どもも、差別なく社会の中で同じように生活できるよつにすること」だと考えました。私は、祖父母と暮らしています。ですから、ここでは、高齢者についてできることを考えてみようと思います。

今までの日常生活の中で起こったことを思い出してみました。祖父は毎日、朝早く起きて畑仕事や草刈りをやっています。そのおかげで家の周りは、草もなくなきれいになっています。ある日、祖父が刈った草を拾ってあげると、「ありがと、助かるよ」と額の汗をタオルでぬぐいながら言われました。更に私が、「おじいちゃんのおかげで家がきれいになるよ、ありがと」と言つと、「すくうれしそつに笑つて、その顔は今でも忘れられません。

これからは、できる限り手伝つてあげられたらいいなと思っています。そうすれば祖父の負担も少しは減ると思うからです。

祖母は足が悪く、手術をした今は歩けるようになっていますが、杖をついて毎日生活しています。しかし、家族の中で一番元気があり、よく畑にでて、おいしい野菜を作っています。声も大きくよくしゃべります。

また、祖母は「部活はどつだ？テストはできたのか？」などいろいろ気にかけてくれます。以前、母に写真を見せてもらったことがありますが、私が、小さいころ、祖母に抱っこしてもらっている写真です。祖母の、はち切れんばかりの笑顔が写っていました。ある朝、学校に行く前に、「足の調子はどつ？昨日のキウウリおいしかったよ」と祖母に言つたら、写真で見たような笑顔で「大丈夫だよ、いつてらっしやい」と言つてくれました。何か、とてもうれしい気持ちになったのを覚えています。

まだ私の祖父母は元気ですが、高齢者になると、目が見えにくくなったり、足が弱ったり、物忘れをしたり、耳も遠くなりやすくなります。そのような方と出会つた時、私にできる事として、優しい言葉をかけたり、困っていたら手助けしてあげたり、手をつないで安心させてあげることがあります。勇気のある事だと思いますが、こんなささいな事でも高齢者の方の心は癒されるのではないのでしょうか。高齢者の方たちにとつて、一人ぼつちはつらいし、さびしいことだと思つのです。これまでの経験からそう思います。

小学生の時、お祭りで神輿を老人ホームで担いだことがあります。その時、孫と接している

共同募金会開成町支会長賞

「笑顔を大切に」

三年 佐野 知美

かのように私たちの訪問を喜んでくれて、最後は私たちの姿が見えなくなるまで手を振って下さったのを覚えています。高齢者の人たちは好きで足が悪くなったり、耳が遠くなったりしているのではありません。いつまでも元気で、若々しくいたいのだと思います。そういう生活が少しでも長くできるようにしてあげたい。そしてそれは、私たち一人一人の気持ちだと思います。

福祉活動というと、難しく考えがちですが、すぐ身近にいる祖父や祖母、近所のお年寄りの体験談やいろいろなお話を聞くことや、また、あいさつひとつでも十分ふれ合うことができます。と思っています。それで、お互いに気持ちよく接することができたら幸せな気持ちになれると思います。これこそ福祉だと思っております。私にできる小さなことから始めて、誰もが安心して、楽しく過ごせるような町づくりを目指していきたいと思っています。

開成町社会福祉大会朗読作文

「笑顔。」それは、人がうれしいとき、幸せなときに自然となる顔。笑顔は広がる。笑顔の人を見て笑顔になる。その笑顔を見た人もまた笑顔になる。誰かが笑顔になれば、周りの人がみんな笑顔になる。私も今までいろんな笑顔を見てきた。そしてその笑顔を見て私も笑顔になった。笑顔ってすばらしいと思う。周りの人も笑顔にしてしまっただから。

私は、中学一年生のとき、職場体験で介護老人保健施設「あじさいの郷」に行った。そこに行こうと決めたのも、お年寄りとのコミュニケーションなら私にもできるだろうというのとなくの理由からだ。

職場体験当日の何日前か前、職場の方との打ち合わせがあった。私はその時初めてあじさいの郷に行った。打ち合わせをした場所は、施設を入つてすぐの一階のフロアだった。実際にお年寄りが生活しているのは二階だったので、その時はその施設に住んでいるお年寄りの方々の様子を見ることはできず、どんな感じなんだろ

うなと少し不安を抱きながら当日を迎えることとなった。

そして職場体験当日。私はかなり緊張していた。打ち合わせでは、主にお年寄りとのコミュニケーションをとることをしてほしいと言われていたが、相手がどんな人か分からないということもあり、どうやったらうまくコミュニケーションをとれるのか、喜んでもらえるのかと不安でいっぱいだった。

あじさいの郷に着くと、打ち合わせをしてくださった方が迎えてくれた。入つてすぐの一階のフロアには他の職員の方々もいて、朝の打ち合わせが始まるところだった。打ち合わせの中で、「今日一日職場体験で来てくれた中学生です。」と紹介され、私は「よろしくお願ひします。」とあいさつした。「よし。一日頑張るぞ。」と気合が入った気がした。

ここからがいよいよ本番。打ち合わせが終わる二階に上がると、お年寄りの姿があった。少し戸惑っていた私に、職場の方が、「この辺に座つて。」と言つてお年寄りの方が座っている席の間の席を私に勧めた。そこに座ると、お年寄りの方から話しかけてくれた。「中学生?」「と聞かれたので、「はい。」と答えると、「中学何年生?」と聞かれ、「一年生です。」と答えた。

しかしお年寄りに「えっ?」と聞き返されてしまった。私の声が聞こえなかったようだ。普通にしゃべったつもりだったが、お年寄りにとっては私たちが普段話するときのような声の大きさでは聞こえないのだ。私はその時気付いた。みんながみんな同じように音が聞こえて、みんなが同じようにできているわけではないんだということ。普段の生活で、私の身の回りにはあまりお年寄りがいない。だから普段はこういうことにあまり気付かずに生活していたのだ。

私はもっと大きな声で、もう一回言った。するとそのお年寄りの方は、「そうか。中学一年生か。」と言って笑顔でまた話してくれた。お年寄りの方は話すことが好きで、にこにこ私に笑顔を向けながらたくさん話をしてくれた。笑顔を見ると、すごくうれしくなった。最初は戸惑ってばかりだったが、「役に立てたんだ。」という実感がわいてきて、とてもうれしかった。自然と私も笑顔になった。

昼食の時間が近づくと、昼食の準備が始まった。私は、お年寄りの方に前かけを結んであげたり、食事を配ったりした。食事を配るときは、その人の名前を呼んでから食事を置くように職場の方から言われていたので、さっきの反省

を生かして大きな声で名前をよんだ。すると、「ありがと。」と笑顔でお礼の言葉が返ってきた。私はまた、笑顔になった。うれしかった。

午後は、歌を歌ったりおやつの時間があつたりした。おやつの時間に気付いたことがあつた。一人一人切つたおやつが大きさが違つたのだ。一人一人、その人に食べやすい大きさに切つてあつた。やはりみんなが同じように食べられるわけでもない。ここでもそんなことを感じた。そして帰る時になつた。お年寄りの方々からは、「ありがと。」と笑顔で言われ、握手をしてくれた人もいた。笑顔があるってうれしいなと思つた。

人はそれぞれ個性を持っている。その個性の中には弱点もあるかもしれない。でもその弱点は協力し合えば克服できる。克服し、人がうれしいとき笑顔が生まれる。この笑顔を大切にする世の中であつてほしいと、私は願っている。

開成町敬老会朗読作文

開成町教育長賞

私の祖父

三年 石渡 安奈

昨年の夏、祖父は入院をした。ところがもうすぐ退院という時に、今度は祖母が足を負傷してしまった。家に帰りがついていた祖父だったが、家には戻れず、仕方なく小田原にある病院へ転院となつてしまった。退院ができないまま、年が明け、祖母の足も良くなり、暖かくなる頃、「そろそろ家へ迎えよう!」と、ケアマナージャーに相談をし、話し合っていたその時に、祖父は眠るように逝つてしまった。あまりにも突然のことで、中学二年だった私でも、ちゃんと理解するのに少し時間が必要だった。葬儀時に飾られた写真は、福祉会館のデイサービスで幼稚園に訪問したときのもので、笑顔がとても素敵だった。

祖父は、脳梗塞で九年前に一週間ほど入院をした。体の左側の軽い麻痺が残ってしまったが、まだ幼かった私は、

「もう、平気なんだな。」

そう思った。けれども、その気持ちとは裏腹に、また四年後、入院をしてしまった。今度は、一

ヶ月という長期間の入院となった。無事に退院をしてきた祖父だが、食べることも、歩くことも困難になり、思うように話せなくなってしまうていた。元気な頃の面影がなく、なんだか悲しくなってしまうのを覚えている。その後、福祉会館のデイサービスでお世話になり、元気になっていったように見えた。しかし、だんだん何かをする気力が失せていってしまい、暑い昨年の八月、とうとう三度目の、そして最後の入院となってしまった。塾や部活で忙しかった私は、なかなかお見舞いに行くことができず、一度しか行けなかった。長い間会いもせず、話もせず、同じ屋根の下で生活することもできずに祖父は逝ってしまった。いつも練習しているピアノや、中一から始めた吹奏楽の演奏。ちゃんと聴いてもらったことがなく、今になって聴いてほしかったと思い、とても悔やんでいる。

家族がケアマネジャーに相談したのは、要介護状態になってしまった祖父のために、どんな準備をしたら良いのか、そして介護保険を利用して、少しでも家族の負担を軽くするには、どんなサービスが受けられるのか知りたかったからだ。

この介護保険制度は、四十歳以上の国民が介護保険料を納め、介護や看護が必要な場合に、

一割の負担で誰でもサービスを受けられる制度で、もともとは、在宅介護を重視するものだという。しかし、自己負担額が多額になってしまつ場合や介護者も高齢者である世帯などでは、施設への入所希望が多い。だから、なかなか入所できない状況だそうだ。私の祖父は、施設ではなかったが、それでもすぐに転院先が決まつたわけではなかった。病院の方に探していただいたのだった。また、一割負担になつてしまつたため、定額や無料でサービスを受けていた低所得者にとっては利用を控えざるを得ない場合もあるという。納付者には大きな負担にならないような制度で、どうしたら財源を確保できるのか、私にはまったく考えられないけれど、安心して暮らせる時代が早く来るよう願うしかない。

そして、二千年にこの制度は改正された。大きな改正点は介護予防サービスの充実で、高齢者の健康維持を強化し、要介護度の進行を少しでも、遅らせようとするものだ。介護保険の利用が定着してきたのと、高齢者の人口増加に伴い給付金の伸びが著しくなり、財政破綻も心配されるようになってきたかららしい。ケアマネジャーに聞いてみると、サービスも色々ある。介護する家庭の思いや環境に合った一番よ

いと思われる事を考えて下さる。色々考えなければならぬことなど、たくさんあったが、もう少し早く相談をしていればよかったと思う。もしも、もっと早い時期に家に戻っていたならば、祖父はよくなつていったかもしれない。

長い入院の間、祖父はいろいろしてもらつて、幸せだったと思う。でも、やっぱり家族とは違う場所で、寂しさや心細さもあつたと思う。今考えると後悔でいっぱいだ。あの時私がああしていたら、祖父の幸せが増えたかもしれない。もっと笑顔が見れたかもしれない。でも、もっとそのようなことを祖父にしてあげることができない。だから、これからは「今」を、家族を大切に、幸せを増やしていきたいと思う。

支え合うということ

三年 小川 留依

身の周りをよく見ると、駅に点字ブロックや、デパートのエレベーターには、点字や音声案内などがあります。こうしたものは、目の不自由な方は、とても助かっていると思います。なぜそう思うかという点、私は小学生のときにアイマスク体験を経験したからです。

私が行ったアイマスク体験は、二人一組になり、一人がアイマスクをして目を隠し、白杖を持ちながら歩道橋を渡ります。もう一人の人は、アイマスクをした人の誘導をします。

アイマスクをつけた時は、もちろん目の前は真っ黒になり、なにも見えません。ただ歩くだけでも、どこへ行っているか分からなく、つまづきそうで怖いのに、いくら友達がいるからといって、歩道橋を渡るのには、すごく勇気のいることでした。階段をのぼってみるとどつからどこまでが段差になっているのか、予想が全然つかなく、今にも転んでしまいそうなほどでした。しかし、誘導してくれた友達の指示がとても上

手だったので、転ばずに歩道橋の上まであがることができました。しかし、問題は下がる時です。いくら、友達がいても白杖を持って、手すりにつかまっけていても、落ちてしまいそうになり、恐怖感でいっぱいでした。友達の肩をかりて、なんとか無事に渡ることができましたが、目の不自由な人の気持ちを考えると、誰かにつきそってもらって外で歩くのも、相当大変なことなのに、一人で外を歩くのは、どんなに勇気がいることなのか、この体験をして、よく分かりました。

今、青信号の時だけ、音が鳴る信号があります。これは、目の不自由な人にとってありがたいものだと思います。赤か青か分からないで、間違えて、赤信号で渡ってしまうということがないからです。その点に関しては、とても良い使われ方をしていると思います。

しかし、音が鳴っている青信号の間は、必ずしも安全とは限りません。急にまがってくる車とぶつかってしまふ事だつて、あるかもしれませんが、いくら信号機を良くしたつてこれでは、意味がありません。機械を目の不自由な人のために良くしていくのは、とてもよいことですが、それだけではなんの解決にもなりません。

このような事を防ぐには、車を運転する人が、

気をつけて、意識して運転していく必要があると思います。そうすれば、音の鳴る信号は車を運転する人しだいで、より良くなっていくと思います。もちろんそれは、車を運転する人だけではなく、駅やデパートや道路でも同じです。例えば、駅だつたら、一応点字ブロックがありますが、ホームに落ちてしまふこともありません。しかし、そんな時、誰かが一言、声をかけてあげれば、目の不自由な人は、ホームから落ちなくてすみます。そうすれば、危険なホームでも、恐怖感が少し減ると思います。周りにいる人たちが、気づいてあげて、困つていたら手をさしのべて助けてあげれば、きっと目の不自由な方は、恐怖感を持たずに一人で、外を歩くことが出来ると思ひました。私たちしだいで、こうした方の生活が、少しでも良くなると思ひます。

私は、数年前に目の不自由な女性から、お話を聞きました。この女性は、服装を自分で決めて、ご飯だつて作つています。これをするには、自分なりに一生懸命工夫してました。ご飯を作るために工夫していることは、調味料を間違えないように、ゴムを巻いたりして、手ざわりでそれぞれの調味料が分かるようにしている。そうなのです。そして、服装を選ぶときには、

この服装にはどの洋服があつかとすっかり印をつけているそうです。そんな話を聞いて私はとても驚きました。そして、この女性は、

「出来ることは、自分でやる。」

と言っていて、すごい人だなあと思いました。不可能だと思わないで、出来るものは可能にしていくという考え方がとてもカッコイイと思いました。この女性のように、どんな状況であろうと一生懸命考えながら工夫し、明るく生きていこうとしていて、すごく心に残りました。この女性が、こんなにがんばっているのは、それだけ周りの人たちが良い人で、優しく支えているからだと思います。私も支えてくれている周りの人に感謝をして互いにたすけあいながら生きていきます。

フェイス トウ フェイスの地域力

三年 前田 菜々美

八月二日空を見上げると曇天で、今にも雨が降りそうな天気でした。その日は、「中学生地域交流ゲートボール大会」の日でした。朝七時過ぎ、祖父に大会の実行を告げる連絡が入りま

した。

私の祖父母は、地域老人会の会員でゲートボールを週二回仲間達と楽しんでます。中学生になつてから毎年「今年こそゲートボールに参加して。」と言われてきました。でも、部活動が忙しく、何時も、「今度ね。」と言って断ってきました。「今年でおじいちゃんは喜寿になつて、何時あんとゲートボールができるかわからないんだよ。」と叔母に笑いながら言われ「喜寿？もう、七十七歳になつてしまったのか。」と祖父を見ると、背が高く格好良かった祖父が小さくなっているのを感じました。「今年こそ。」と言われ続けた三年間の約束を、果たそうと思いました。朝六時半、眠い目をこすりながら練習に行くと、老人会の方が数名、自治会の方、保護者の方がいました。スティックの持ち方等を、一から丁寧に指導してくれました。祖父母が他のメンバーを指導している姿を見て、毎年何人かの中学生を指導し交流してきたのかと、改めて普段と違う祖父母を見ました。一週間弱、思春期の中学生に嫌な顔も見せず、指導してくださった方々に、少しでもお礼を返せたらと、試合の日はベストを尽くそうと思いました。私は恨めしく空を見上げていると、「大会中止」の連絡が入りました。今年のゲー

トボール大会は雨で中止となりましたが、ゲートボールの練習に参加して感じたことがあります。それは、「フェイス トウ フェイス」が重要だということです。

最近ニュースでは、暗く悲しい事件が多く報道されているように感じられます。ニュースのコメントーターや専門家が口を揃えて言うことは、「何故、ご近所の人や地域の人が知らなかったのか。」ということ。一人暮らしで寂しい老人を狙った、オレオレ詐欺や振り込め詐欺、架空請求等の悪質な詐欺で、お金を巻き上げられてしまい生活費を失ってしまつた。また、最悪な場合は死に追い遣られてしまつたりと、本当に遣り切れないことばかりです。未曾有の不況だと嘆くのではなく、今こそ、日本人が紡いできた、コミュニケーション力が問われているのだと思います。昔の日本の伝統に「結」というものがあります。それは、地域で協力して田畑の仕事や冠婚葬祭をやることです。今、そういった伝統が消えてしまつたのは、そういった伝統を面倒くさがる若年層が増え、伝統を伝えられる世代の人が少なくなつたからだと思います。また、地方を捨て都心部に出て行った結果、地方では過疎化が進み限界集落ができ、自治会活動に支障が出ています。私達が住んで

いる開成町では、子供がたくさんいて第二小学校を新設しています。地域活動には大勢の人が参加し、競い合っています。そう考えるとこの町は、過疎化とは無縁なのだろうと感じています。

では今、社会全体が必要としている地域力とは何なのでしょう。社会的弱者だけではなく全ての住民の『見守りネットワーク』が必要なのではないでしょうか。それは子供や老人、身体の不自由な方や病気の方が安心して生活できる地域が必要だという事です。ただ、個人情報を守りながらネットワークを作るのは困難な事だと思えます。私の考えた見守りネットワークはごく当たり前の事です。回覧板の手渡しやゴミ出し時のマナー、様々な人に挨拶を隔たりなく交わす事です。日常的に地域の人が顔を合わせる事で、お互いに「変わった事はないか。」と確認できるからです。そして、日常的な事から信頼関係を築き上げる事が大切です。子供や老人をネグレクトしない安心した生活環境が、古き良き日本の伝統・結に繋がるのだと思えます。見守りネットワークだからと畏まらずに、誰もが公平な立場で周りの人と挨拶を交わし、日常的に明るい開成町または各自治会そして近所、一番大事な家庭が健全である事

が大事なのだと思います。

中学生の私ですが、フェイストウフェイスの地域活動を一から始めていかなくはならぬいと実感しました。まずは「おじいちゃん喜寿の誕生日おめでとう。」と言って、今まで育ててくれた家族や地域に感謝しようと思います。

佳作

心と笑顔

三年 遠藤 未菜

私にとって福祉とは、日常生活の一部であり、とても身近なものでした。

私の祖母は、私が幼稚園のときに病気になるてしまいました。なので、車イスの生活となつてしまいました。しかし、それだけではなく言葉もうまく話せず、利き手だった右手も動かなくなつてしまったのです。

祖母はそれまでとても元気で、毎日畑仕事や家事をこなしていて、本当のことだと思えないくらいでした。

それから、病院を退院して、自宅で過ごしま

した。母が介護をしました。母にとって初めての経験でした。やわらかい食事を作り、トイレや歯みがきなどしてあげていました。祖父も、自分の力で外にできることのできない祖母の車イスをおして、散歩につれていってあげたりしていました。特に覚えてるのは、部屋と廊下に段差があつて、車イスが動きにくいので、祖父が木の板で段差をなくすものを作っていたことです。

私の家族はとても優しいなと思いましたし、介護というよりは、コミュニケーションだったのかなと思いました。

しかし、その中でも朝という忙しい時間があります。そこで、週に一、二度ヘルパーさんが家にきてくれました。

ヘルパーさんとは、介護を手伝ってくれる人のことです。朝、車で家まできてくれて、祖母を車イスに乗せたり、服を着がえさせたりして下さっていました。私達にも親切で人柄の出来るお仕事だと思いました。朝の三十分ですが、とても貴重だったと思います。ヘルパーさんを見て気付いたことがあります。それは、いつも笑顔で明るかったということです。朝、きたら笑顔で、

「今日は調子どうですか。」

「今日はお天気がいいですよ。」

などと、声をかけていました。そして、私達にもいつもあいさつをしてくれました。

そのことを思い出して思うのは、「笑顔」って大事ななあということですよ。笑顔はみんなを元気に明るくするといいますが、まさにその通りだったと思いました。祖母もヘルパーさんに心を許していたと思います。

しかし、私は祖母に笑顔を多くみせてあげることができませんでした。祖母が病気になるまで、元気だったときと違い、自分自身がとまどってしまい、また、正直怖くなってしまいました。それにより、上手くコミュニケーションをとることができなくなっていました。それは、すべて私が反省すべきだと思っています。

それでも両親、祖父は、もっとおばあちゃんとは仲よくしなさい、しっかりしてね、などとは一言も言いませんでした。それは、その頃の私が幼かったこともあると思います。しかし、きつと一番の理由は、心から接してほしかったんだと思います。自分から、祖母の方へと行ってほしかったんだと思います。けれども私は、小学校高学年、中学生と成長しても、そのことに今日まで、気が付くことができませんでした。祖母は、元気な頃、よく私の面倒をみていて

くれました。一緒にビーズのネックレスを作ったことを今でも覚えています。そんな祖母に申し訳のないことをしてしまった私は悔やむ気持ちで一杯です。もっと笑顔を、もっと言葉をと今となって遅いと思いますが、あのときできてあげればなと強く思います。そして、祖母を支えていた家族にも申し訳ないと思っています。

だからこそ思います。

みなさんにとって福祉に必要なものは何だと思えますか。福祉に関する技術と答える方がたくさんいると思います。確かに大事です。ですが、私は、心と笑顔だと思います。心からの行為でないとい、相手も嫌がるでしょう。たとえ心があったとしても表情がキツイと相手も気分が下がります。そして、一番の魅力は、私達でも実行できるということですよ。ボランティアなどでとまどってしまっても、このことを意識すれば、自然とコミュニケーションができるはずですよ。相手の方々もその方が楽しめると思います。

私はこれから、自分の経験を生かし、ボランティアなどに参加していきたいと思っています。祖母と、心と笑顔を忘れずに。

インスタントシニアを体験して

三年 遠藤 美希

昨年の秋、私は家族で出掛けるときに駅でおばあさんが階段を上る姿を見て足を止め、「大変そうだな」と、しばらくその様子を見入ってしまいました。

そのおばあさんは、ひざの調子が悪いのか、または足のどこかに障害があるか分かりませんでした。鏡を掛けていたので、視力が悪いと感じました。その時は、家族と出掛ける時であり、また私一人で声をかけることや、手をさしのべることなどは、全く思い浮かべることはしませんでした。

それからその日に見たことを全く忘れていました。ある日、私は家で自転車を止める時に倒れてしまい、軽いねんざをしてしまいました。ねんざをした足は少し腫れる程度でしたが、くるぶしが痛く、歩行すること、また特に階段を上り下りする時は困難でした。幸い、軽いねんざであったことから、約一週間、湿布を貼って治りました。

その時に、秋に駅で見かけたおばあさんがつ

らそうに階段を上っていたことを思い出しました。私は、生まれた時から身体に障害が無く健康に過ごすことが出来ていますが、おばあさんのように年をとると、どのような身体の状態になるかが気になり、本で高齢者や障害者のことについて、調べてみました。その中で、「インスタントシニア」という内容がありました。

インスタントシニアとは、今後訪れる超高齢社会を豊かにするには、私たち一人ひとりが高齢者への認識を深めることが必要で、その体験が福祉のイベントなどで体験できるものであると書かれていましたが、その体験をどこでできるか、また中学生の私が体験できるのか分かりませんでした。また、私一人で体験をする、したいという意識や意欲までは起きませんでした。

三月になり、隣町の社会福祉協議会の福祉のイベントに「インスタントシニア体験」ができることを、チラシで知りました。その時、秋に駅で見かけたおばあさんや、私がおんざしたことを思い出し、母に、「イベントでインスタントシニアを体験してみたい。」と伝え、見に行くことにしました。

その後、その福祉のイベント会場に母と行ったところ、車いすの展示や、障害のある人が作

ったブローチ販売などの、色々なコーナーがあり、多くの人でにぎわっていました。しかし、インスタントシニアのコーナーは体験する人がいらないらしく、さかんに参加を呼び掛けたことから、参加をすることができませんでした。

まず、インスタントシニアとは、いくつかの種類の器具を身につけることによって、普段何気なく行っている日常・社会生活の動作を行うことにより、高齢になることで身体の機能の低下や、心に感じるものがどのようになるか、体験をすると説明されました。

次に実際に体験することになり、目にゴーグル、耳に耳栓、手首・足首に重りをつけ、つえを持たされました。「ゴーグルは白内障体験用なので、少し見えませんが気をつけてくださいね。」と注意がありました。

体験は、誘導する人の声を頼りに部屋の中や階段を歩きました。ゴーグルをつけていることによって、目の見える範囲が狭くなり、「目が見えないとこんな世界で怖い」と思い、手首や足首に重りをつけることによって、思うように手と足を動かすことができず、歩いたり、方向をかけることが非常に難しく、予想していた以上で大変でした。

この作文を書くにあたり、「人権」という意

味は何となく分かるが、どのようなことがよく分からなかったので調べたところ、「人が人として幸せに生きていくための権利」で、高齢者や障害者であっても、また同和地区出身者であっても、同じ人間として、誰でも幸せに生きていようと願っている。この人間として「あたりまえ」のことが人権である、と書かれていました。

私は、インスタントシニアを体験することによって、高齢者や障害者の気持ちがよく分かることができ、優しくしたいと思いました。

人間が誰でも不公平がなく、「あたりまえ」に幸せに生きていくためには、安心して住みやすく、明るい未来をつくる必要があります。多くの問題を解決しなければならぬと思います。しかし、この「あたりまえ」にしていくことは、すごく難しいと思います。今後、私は、高齢者や障害者など、人間として「あたりまえ」のことについて、差別する態度や言葉に気を付けて、優しい目を向ける心がけをしていきたいと思えます。そのためには、今後、色々なことを勉強し、経験していきたいと思えます。

小さな思いやり

三年 吉川 美帆

二年前、夏休みも終わりに近づいた日の朝、私がまだ眠たくてボーっとしていた時、一本の電話がなりました。電話に出た母の様子が変でした。電話を切った後、母が父におばさんが亡くなった事を話していました。私もビックリしてとび起き、両親とおばさんの家に向かいました。

おばさんは第一子を出産後、リウマチを発症し、義母・義父・旦那さんの介護を、長年に渡り痛む手で一生懸命やってきました。旦那さんも亡くなり、娘三人と生活していましたが、亡くなる一週間位前から夏かぜをひいていました。朝方、水をほしいと言い、水を飲んでまた寝ましたが、その後、子供がいつもの様に起こそうとした時には、返答はありませんでした。死因は、タンガのどにつまり、呼吸不全を起こしたものでした。

リウマチとは国内に七十万人もの関節患者がいます。病状としては、関節がはれあがり慢性的な痛みに悩まされ、心臓や肺にも変化をきたすこともあります。また、薬で効果が期待で

きる半面、副作用に注意が必要です。

病状は五十歳頃から徐々に悪化し、最後は家族に介護され亡くなりました。五十七歳という若さでした。

リウマチは障害者手帳が発行される病気で、急性なら、すぐに発行されますが、慢性的な場合はかなり時間がかかります。また、みんなが福祉の事をよく知っているわけではないので、おばさんはリウマチが障害者手帳をもらえず、という事を知るのに時間がかかったそうです。障害者手帳がもらえると、タクシー代半額やバス、電車が無料、医療費も無料だったり、いろいろ助かります。五十七歳では、まだ年金がもらえません。手帳をもらうまでは、女性が働いても高額なお給料はもらえないために、家族は休みなく一生懸命働いていました。

おばさんは、数年前からトイレも一人で行けない、窓を開ける事さえできないような病状でした。家族は仕事に出ているため、風も通らずエアコンもない家で一日中一人で過ごしていました。時にはトイレを我慢して、気持ち悪くなってしまう事もありました。一日過ごすのになにげない事、例えば暑い時にはシャワーをあびたり、汗をかいた時には着がえたりと、私だったら苦労する場面なんて一つもないし、薬を

飲むのも口に入れて水を飲む、ただそれだけの事です。私達が日頃やっているなにげない事が、おばさんにとっては、苦勞を伴い、時間がかかる大変な作業となっていました。

病院に行く時にも、まず車イスに乗る事さえ苦勞します。乗せる手助けをする人が若くても腰を悪くしてしまったりします。また、家族に車の運転をできる人がいないため、近くなら、車イスを押ししてもらい、歩いて行けませんが、舗装されていない道を通る時などは、車イスを押しだけで大変です。他にも歩行者信号の長さ、途中で点滅し始めても早くは進めません。また、横断歩道に入る少しの段差も車イスでは乗っているおばさんにも負担がかかり、押す人もとても大変です。病院が遠い場合は、タクシーを使う事もありました。タクシーの運転手さんも良い人もいれば、何も手伝ってくれない人もいます。「良い運転手さんに出会えた時は、本当に嬉しくて涙をながした。」と話していました。私達も調子が悪い時の人の思いやりのない態度は、いつも以上に悲しくなります。今は隣の人の顔も知らない人は、とても多いと思えますが、それでは自分が困った時、誰も助けられない人がいないような状況だと思えます。昔からあるご近所付き合いは、病気だけでなく災害

時など、助け合いが必要な時とても大切です。

おばさんの話や介護をしていたいこの話を聞いて、介護について同じ悩みを持った人と話せる情報交換の場を病院の中に設置したらいいのでは、と思いました。道路を工事する事よりももっと簡単な事だと思います。また、何も知らない人でも、車イスを押すのを手伝ったり、自然に行動できる人がふえたら、介護している人達の苦労も減らせる事ができると思います。そして、そんな小さな思いやりが、病氣の人にはとても嬉しい事なのです。

助け合う心

三年 下山 梨穂

「福祉。」これについてよく考えるのは小学五年生くらいの頃から。小学五年生の時、総合の時間に福祉について勉強した事がきっかけである。今世の中では助け合い、思いやりといった普段から心がけている事が必要とされているにちがいないだろう。助け合い。それは人が困っていたら助けてあげる事。例えば電車やバスでお年寄りの人が居たら席をゆずってあ

げるなど。簡単そうだが、いざとなると難しくなる。実際にそういった場面にあった事はないが、案外自分から席をゆずってあげる事ができないのが今の現実であろう。何故自分から積極的に行動できなくなるのか。助け合う事って、今の自分達にとってこれからの社会で生きていく上で大事な事だと思う。でも勇気を出して席をゆずる事もできない。もし自分がそのような場面にあつた時どうするだろうと考える。絶対とはいえないが、勇気を出してゆずれないと思う。でも、もしゆずる事が出来たらお互いがよい気持ちになると思う。席をゆずって「ありがとう」なんか言われたら誰だって嬉しいキモチになるだろう。助け合いってお互いがよいキモチになれる事でもあるのかもしれない。

次に「思いやり。」人の事を思う事。これはよく人との関わりがある時に使う心づかいであろう。例えば友達と一緒に遊んでいる時。A君がゲームのソフトがない時にB君が、かしてあげるとか。おおまかに考えれば、助け合いにも似ているだろう。人が困っている時に、助けてあげる事。社会の中で、生きていく上でとても大事な事。思いやりの心がない人なんか、探しても数少ないだろう。思いやり。皆が普段からしている事だろう。皆がお互いに助け合ってい

き平和な暮らしへと、安全な暮らしになつて欲しいと私は思う。そして人との交流を増やしていきたい。

「障害者。」この言葉には、小学五年生の頃、福祉について勉強し、いろんな事を知つた。私が小学五年生の時、目の不自由な人を呼んで、いろんな事を教えてもらつたり、ゲームをして楽しんだのを今でも覚えている。一クラスに一人障害者のある人に来てもらつた。障害があるのにも関わらず、リコーダー、ハーモニカを弾ける人もいた。目が不自由なのに、「凄い！」と思つた。なんだか圧倒された。障害者達がハーモニカなどで奏でるハーモニーは、とても素晴らしいものだった。驚いて何も言えないくらい。素敵でした。また聞ける事が出来たら嬉しい。

そして演奏を聴いた後、ゲームをした。伝言ゲームやふく笑いなど。とても楽しかった。よく障害者だからって差別する人とかいるけど、別にそういうのもなく、友達と普段遊ぶ時のように皆楽しんでいた。

給食も一緒に食べた。皆で机を円にして、いつもより楽しい給食でした。障害者の方は、食べ物置く場所が決まっていっておかずが一番上、ご飯が手前の右、スープが手前の左、とい

うようになっていました。障害者の人はいつもそのようにして食べていると聞きました。食べ方も同じ。それはまるで、目が見えているかのように。障害者には見えない程でした。

今、公共の場では、障害者達のためにいろんな事を工夫している。エレベーターには車イス用に高さも低い所に押すボタンがある。また点字も最近いろんな所につけてきた。ビールの缶を開ける時の口元の所、シャンプリーやリンス、リモコン、マヨネーズなど。さまざまな所についてきている。障害者の人達にとってそれはとても役立つているだろう。点字がなきゃ絶対に不便だと思う。これからも、いろんな生活用品に点字をつけていって欲しい。障害者の人達が安全に暮らしていけるために。今自分達に出来る事って何なのか。考えてみた方がいいかもしれない。

バリアフリーやユニバーサルデザインも、これからもっと増えていけば誰もが安全に暮らせるだろう。実際に、駅にはエレベーターがあったり、階段に手すりがついてたりしている。障害者の方以外、お年寄りの方でも、それはとても役に立っているだろう。よく、電車で優先席に高校生とかが座っている時があるが、それはいけないと思う。優先席を作った意味がない

のではないか。だから、もしそのような事があったら注意しなきゃいけないのかもしれない。もしくは席をゆずるなど。助け合い、思いやりが大事だと思う。

これからも助け合いをしながら将来、今よりずっと、もっと安全に暮らせるようになっていって欲しいなと私は思います。

貧しい子どもたちとユニセフ

三年 岩科 和美

私はこの夏休み、ユニセフリーダー講座に参加しました。参加してみて、ユニセフハウスを見学したり、ネパール・マホタリ郡から来たゲストさんがネパールの状況を教えてくれた。いろいろな問題がありました。例えば経済問題で、収穫期には親を手伝うのに忙しくて学校に行くことが難しいなど社会問題で、女性の地位が低いネパールでは、女の子は家の手伝いをして学校に通う必要はないと考える家庭が多いなど、さまざまな問題があります。そこでユニセフリーダー講座では、自分が事業担当官ならどうするか、事業目的は、「ネパール・マホタリ

郡のできるだけ多くの子どもたちが、小学校に通い、卒業できるようにする。」を班になってそれぞれ自分の意見を考え、話し合った内容を発表しました。みんなわかりやすく短時間なのに今すぐ実行できそうな内容ばかりでした。

ユニセフ基礎講座では、私が知らなかった、たくさんの事を知りました。「十分なケアを乳幼児に、子どもの生存と成長」では、世界で5歳の誕生日を迎えることなく亡くなる子どもは年間九百二十万人。その原因の多くは安全な水やワクチンがあれば、適切なケアを受けられていれば防ぐことができるものです。それでユニセフは、すべての子どもが乳幼児期に十分なケアを受け、守られ、より良い人生のスタートを切ることができるよう、予防接種の普及、安全な水や衛生的な環境の確保、母乳育児の推進、栄養改善など、総合的な支援をおこなっていることが分かりました。他にも、「すべての子どもに教育を、基礎教育とジェンダーの平等」では、貧困などのために学校に通うことができない子どもは九千三百万人。その半数以上は女の子です。教育の機会は、子どもがその能力を十分に伸ばしながら成長し、社会に参加し、またその次の世代を健やかに育てていく基礎にな

ります。それでユニセフは、男の子も女の子も平等に学ぶ機会を得、質の高い教育を受けられるよう、学習資材の提供、学校施設の整備、教員へのトレーニングなど支援していることも分かりました。それでもまだたくさん問題があります。「教科書はもらえるが、文房具を買えない家庭が多い。」や「低カーストの子どもに学校に行けない子。」や「校舎が狭くて、窓にガラスがないため、強い雨や風の際は授業ができない。」や「先生の教え方が下手で、分かりにくい。」などまだたくさん問題があります。

他にも、「子どもの保護を最優先に暴力、搾取、虐待から守る。」では、極度の貧困や紛争などによって安全な生活環境を失った子どもたちは、搾取的な労働や人身売買、暴力の危険にさらされます。いまも、一億二千六百万人の子どもが厳しい労働を強いられ、また、出生登録されていない多くの子どもたちは、教育や保健など必要は社会サービスから取り残されています。それでユニセフは、特に厳しい状況にある子どもの保護と、すべての子どもが家庭や社会で、また法的にも守られる環境作りを支援していることも分かりました。他にも分かったことがあって、世界では、三秒に一人の子ども

が、五歳になる前に命を失っていることもとても悲しく思いました。

「子どもの権利条約」の四つの柱があります。まず一つ目は「生きる権利」です。子どもたちは健康に生まれ、安全な水や十分な栄養を得て、すこやかに成長する権利を持っています。

二つ目は、「守られる権利」です。子ども達は、あらゆる種類の差別や虐待、搾取から守られなければなりません。紛争下の子ども、障害をもつ子ども、少数民族の子どもなどは特別に守られる権利を持っています。

三つ目は、「育つ権利」です。子どもたちは教育を受ける権利を持っています。また、休んだり遊んだりすること、様々な情報を得、自分の考えや信じていることが守られることも、自分らしく成長するためにとっても重要です。そして最後の四つ目は、「参加する権利」です。子どもたちは、自分に関係のある事柄について自由に意見を表したり、集まってグループを作ったり、活動することが出来ます。そのときは、家族や地域社会の一員としてルールを守って行動する義務があります。この四つが「子どもの権利条約」の四つの柱です。私は、ユニセフリーダー講座に行っていた皆さんの事が分かって私にもできることをやりたいと思いました。そして、

ユニセフが、たくさん問題を解決する、未来のためのプロジェクトになってほしいです。

(原文のまま掲載しています)

第 22 回 開成町福祉作文コンクール 審査員名簿

審査員

9月15日(火)の審査会にて、代表作文を審査いただきました。

順不同 敬称略

所属機関・役職名	審査員名
開成町立開成小学校 校長	小高 達夫
開成町立開成小学校 教諭	小瀬 雪子
開成町立文命中学校 校長	大平 実
開成町立文命中学校 教諭	柳下 直美
開成町教育委員会 充て指導主事	遠藤 悟
開成町老人クラブ連合会 会長	井上 勇
開成町身体障がい者福祉協会	遠藤 伸一
開成町ボランティア連絡会	落合ふたば
開成町福祉課 課長	瀬戸 俊雄
開成町社会福祉協議会 会長	藤沼 喜之

特別審査員

川澄 暉

審査会に先立ち、中学校の部 代表作文 10 篇を選出いただきました。

この冊子はともしび基金果実助成により作成しました。

発行日 平成 21 年 10 月

発行 社会福祉法人 開成町社会福祉協議会

〒258-0021

神奈川県足柄上郡開成町吉田島 1043-1 (福祉会館 1 階)

TEL0465-82-5222 FAX0465-82-5928

URL : <http://www.kaiseishakyo.jp>

Email : network@kaiseishakyo.jp